

現代日本の「実学」と「美学」（後半）

——人間形成の思想をめぐる考察——

城 達 也

後半の序

一周回って振り出しに戻る。しかしそのあいだに、たった一人の強欲者の暴走を他の誰も止められなかったとはどういうことか？ 彼はつねに権力者に付き、自らの出世の道具としてその人物が用済みと見るやまた別の権力者に付いていく俗物の典型である。もちろんその余波を受けて困惑する人たちが出てくる。しかし自分の強欲で振り回した人たちに詫びの言葉もない。思い通りにならなかった悔しさのほうが強く、他人をリスペクトするなどという公約はまさにお題目に過ぎない。

腐っても最高学府なのではないか？ 数ある選択肢の中でいずれかを決める場合には、できる限りの情報を集めて、科学的、実証的に分析して、政策の根拠づけをすべきである。学問と政治、科学的分析と政策判断とはM・ウェーバー（1864-1920）以来のテーマだ。しかし実際には、パワーポリティックスしか存在しない。たしかにこんにちの学生たちは大人しくて、日大闘争や東大闘争の初期段階で見られた素朴な大学への要求など出していない。それをよいことに、教職員も理事もますます「聞く耳を持たない」のであり、学生たち、保護者たちがまったく見えないのである。百万円の寄付でポストを与えるな。

最終的に正論を述べたのは、なんと労働組合であった。労働組合に言われての方針転換。もちろん理事たちは正論に納得してではなく、自らの支持母体を失うことを恐れての判断である。ここでも権力政治が続く。他方で財界を退いた者たちは昼行灯よろしく存在感も何もない。「不作為の作為」が組織にどんな迷惑をもたらしているか知るべきだろう。

さてそんなアナクロな運営が残る教育組織において、アカデミズムの体裁に拘る教授陣とそのような教育体制に影響を受ける若者たちの人間形成について考察を続けよう。

知識人の思考が歴史を最初に創ったのはフランス革命である。理論と実践の新しいかたちを碩学の哲学者ヘーゲル（1770-1831）は祝ったという。ブルンクホルストによると、近代の知識人は貴族の秩序を新しい価値で置き換える役割を担ってきたという。この価値補填機能によって彼らの文化的ヘゲモニーは長期間維持された。そしてこのような文化的ヘゲモニーの傾向は第二次大戦後も続いた。実存主義的な彩りを加えながら、「ジャーマン・マンダリン」層、すなわちドイツの教養市民層のヘゲモニーは、最終的には西洋近代に開かれて安定する。もっとも大学人たちは政治的に無力化し社会的にも自らの職業役割に限定される。文化的にもナチスへの彼らの関与によって信用を落とした。やがて1945年

生まれ世代が成長すると左翼知識人として影響力を持つに至る。

ブルンクホルストによると、1956年の討論で、知識人の中でも伝統的な立場のA・ゲーレンが、多くの者は反省と自由の作用によって制度が壊されることには回避的だと述べたのに対して、進歩的知識人であるアドルノは合理的行為能力、反省と自由の潜勢力を主張したという。ゲーレンは文化的危機を心配して自由を統制すべきだと言い、逆にアドルノは反省と自由による制度の超越に関心があった。その後、文化的近代を支持する進歩派の流れが強まり、ゲーレンのような古い教養市民層のヘゲモニーは壊れる。そして1967年にドイツの文化的伝統は終焉を迎える。学生運動の流れが平等主義的知識人と合流したのである。70年代になると再び精神科学あるいは歴史科学が近代社会のコストを補償する役割を持つべきだという主張に戻ってくるが、その場合でも伝統的な教養階層と違って、現状の産業組織の発展を支持したのである[Brunkhorst 1990: 43-66]。

さて日本のことを改めて考えると、そもそも大正教養主義すら、河合栄治郎の文章にあったように、資本主義社会での立身出世や国家権力への関与から自己形成を引き離して考えていたと言える。脱社会的に自己形成は「精神」の陶冶、自己の内面性の強化だと唱えた。そのためには近代的な理性、知性が必要であるという知性主義でもある。ところが次の世代になると、人格形成において現状の経済システムや国家権威を解体する「社会変革」が重視された。肉体形成を通じて精神の勇氣や冷静さ、社会変革の行動を通じて意志の強さが自己形成に求められた。ここで人格形成における「脱社会」傾向は「対社会」に変わったと言える。知性よりも意志、論理よりも感情、言葉より肉体を求める生命主義となり、個人の勇氣、冷静さ、意志を求める行動主義とつながる。

こうした流れは戦後になっても旧左翼や「進歩的知識人」から始まり、さらに新右翼や新左翼という自己形成の急進化の中で繰り返している。全共闘世代と大正教養主義とはどちらも現状社会から距離を取るという点で同一性がある。学生運動が教養主義の培養器である東京大学から登場したのは理由がある。ただし脱社会的だった教養主義に対して、戦後世代の若者たちはそれを批判し、社会からの離脱よりも社会への攻撃を求めた。知性はまだ求められているものの、しかしそれは「対社会」となる知識に入れ替わり、一方では社会変革につながる知識、他方では日本の伝統に根付いた文化が求められる。

第二次大戦後の日本の大学教育も、一般教育課程に見られるように「教養」を求めた。リベラル・アーツはもともと民主主義の理念を実現し、市民エリートを養成するための教育であった。全共闘においてもその方向は同じである。教養主義は市民社会の規範形成という側面もあるが、他方ではその普遍志向と倫理観は、現状の社会を批判する素地でもある。ただし、全共闘世代は戦後の理念が徹底していないと批判した。社会から離れるはずの教養教育は、じつは現状組織の中に人材を投入するためのものでしかない。それが新左翼の言う「ラディカル」な批判というものであった。こうして人格形成のあり方は、その知識内容、価値観の徹底化と、その実現のための意志や勇氣を重視する方法に変わっていくのである。

※ なお本稿は、本稿前半で予定していた後半の章立てを幾分変更していることをお断りする。

第3章 教養主義的政治主義と「体育」への嫌悪感 (続き)

3-3 学生スポーツとアマチュアリズム

本章第1節で取り上げた東龍太郎のスポーツ観は、運動を勉学のためのリフレッシュとして捉えるとともに、また運動での不断の修練が必要だという考え方を示していた。修練としての運動はアマチュアリズムの精神として知られている通りであり、東も大学教育にはそれを求めており、興行価値だけのスポーツ活動を批判している。

このアマチュアリズムは近代オリンピックとともに広がった。少しその考え方を見ると、近代オリンピックの創設者クーベルタン (Coubertin, 1863-1937) は、オリンピックの理念を教育理念と結びつけて構想したという。グルッペのまとめによると、オリンピックの原理と結びついたスポーツの訓練は教育の重要なかたちであった。それまでドイツでは「オリンピック教育」といえば、スポーツの才能ある子供たちの教育の意味で考えられた。しかしクーベルタンはすでに1912年に「オリンピック教育 Olympische Erziehung もしくは Olympische Pädagogik」の概念を使っている。その際、オリンピック競技はたんなる国際的なスポーツ行事以上のものであり、芸術、文学、音楽、学問、建築、そして教育とも結びついて、教育的な文化行事であるべきだと考えられた。選手はとくに世界の子供たちに教育的なスポーツ概念をもたらす役割をする。

たしかにクーベルタンにとって古代オリンピアの競技を近代世界に蘇らせるという計画もあり、そのことによって古代ギリシャ文明を信用していた当時の教養階層の多くに支持された。しかしクーベルタンはその古い理念を彼の生きた時代の経験からする要求と結びつけた。すなわち、戦争や経済的社会的諸問題の解決である。彼はスカンジナビアの体操術 Gymnastik やドイツの体操 Turnen も支持したが、ただクーベルタンにはそれらはあまりに民族的で狭すぎると映った。そこで彼はイギリスのスポーツの人格形成作用に着目し、その国際性と公平性の点で、まさに彼の「オリンピック教育」の概念に適合すると考えた [Hofmann & Krüger Hrsg 2013: 9-12]。

たしかに儀式的要素を残したが、しかし彼は古い理念や運動の実施を求めたのではなく、むしろ新しい近代的な意味を含めた。それはすなわち、「人格形成 Charakterbildung」と「平和教育 Friedenserziehung」である。これは近代の経済的社会的発展がもたらす諸問題への反応であった。教育的でなければオリンピックはローマの決闘場での闘士の闘いのレベルに戻ってしまうであろう。クーベルタンはこうしたスポーツの改革により、教育制度や授業形式全体の改善を望んだ。スポーツ改革はまた、経済や政治を倫理的に改革することでもあった。そして、陸上競技、神殿建築、朗読、フルート演奏、哲学、神への献辞などの結合によって、身体と精神の失われた統一の復活を信じたのである。

クーベルタンにとってオリンピックスポーツとオリンピック教育は五つの基本原則によって規程される。第1には肉体と魂の統一、人間の全体的教育が問題である。オリンピック教育の目的は人間の調和であり、身体の形成だけではない。「筋肉のトレーニングは人間形成に達する」という。第2は「自己完成 Selbstvollendung」あるいは「自己形成 Selbst-

gestaltung」である。スポーツは人間完成への努力を含んでいる。スポーツで可能性をめざす努力が自分自身への働きとなり、よりよき自己への道になるわけである。

そして第3の問題はアマチュアリズムの理念である。この理念はイギリスでは精神的労働者に役立ち、彼らをスポーツ競技で肉体労働者から守ることになるのだが、クーベルタンではある種の自己規律として理解された。つまり、この理念はスポーツにとって、高貴で恭しい性格をもたらすという。物質的な報償は自分自身にもオリンピックスポーツにも動機とはならない。第4はスポーツと倫理的規則との結びつき、とりわけ公平性、クーベルタンの言葉で言えば「騎士道 Ritterlichkeit」である。そういう道徳的態度は、教えられるものではなく、公平で相手を尊重する状況への対処が必要とされるときに学ぶ。公平性は経験と結びついたときにのみ得られる。こうした実績志向、達成志向、競技志向のスポーツ基準は、いまの健康スポーツ、イベントスポーツ、娯楽スポーツにはない。そして5番目には、スポーツによる平和の理念である。つまり国際性であり、これがクーベルタンにとってもっとも大事な原則である。平和の理念は、スポーツの達成志向や競争志向と対立するものではなく、むしろ貢献するという [Hofmann & Krüger 2013: 12-15]。

たしかにグループによるクーベルタン思想のまとめ方は、やや進歩派に偏ったまとめ方かもしれない。ただ、同じ共著の中では、別の執筆者がとくにアマチュアリズムの思想について社会学的に分析している点は興味深い。ピュップナーによると、アマチュアリズムは当初から階層的イデオロギーだったという。1936年のベルリンオリンピックでは、古代ギリシャとの関係がとくに強調された。ベルリンの博物館島にあるドイツ博物館では競技期間中、ずっと古代の「明光のスポーツ」展が開催された。さらにはオリンピアにあったゼウスの神殿をもとの大きさとで建築して展覧会用の建物として利用した。フンボルト大学では、オリンピアの発掘で見つかった古代の芸術作品の模型が展示された。聖火リレーは古代と現代の架け橋としてシンボリックに表現された [Hofmann & Krüger 2013: 37-8]。

今日まで残るアマチュアリズムの理念は、1894年にパリでオリンピック競技の再興が決議されたときに提示された。そのとき選手のアマチュアの地位と参加権との結びつきはオリンピックの重要な基盤であったという。すでに、19世紀の終わりには多くのスポーツ分野でプロスポーツ組織が発展していた。フェンシング、テニス、乗馬では高額の賞金を懸けて戦った。他方でしかしアマチュア・スポーツ団体も広く発展していた。これらの競技はイギリスでもフランスでも、賞金に頼らない十分な財力を持った、より高い社会階層によって好んで行われていたのである。アマススポーツとプロスポーツの分離は社会的な階層に即して特徴づけられた。会議では、オリンピックの参加権利はアマチュアであることが結びつけられた。よってピュップナーは、この決議がスポーツ競技から階層の混在を阻止するためだったことは明らかであると結論づけている [Hofmann & Krüger 2013: 50]。

クーベルタンはオリンピック競技の設立によって世界平和に貢献することを望んだ。少なくともオリンピック開催中は戦いが休みであるはずだと考えた。「エケケイリア Ekecheiria」とは、オリンピック休戦、あるいはオリンピック祝祭のことである。ただ、実際に古代ギリシャではオリンピックの期間中は全土で戦いなく平和がもたらされたのかどうか

は分からない。おそらくオリンピックから参加国に休戦が求められた後でオリンピックの開催地へ選手や観客の送迎だけはなされただろう [Hofmann & Krüger 2013: 51-2]。

こうしたヨーロッパにおけるオリンピックのアマチュアリズムの思想は、日本でも教養主義において見られる。ここでも同様にエリート階層の文化戦略として理解できるだろう。第1章で述べたことを復習すると、嘉納治五郎（1860-1938）は明治24年（1891年）に旧制五高校長、明治26年（1893年）に東京師範学校の校長となった。寒川恒夫によると、嘉納治五郎がおこなったことは、江戸時代の「柔術」を近代的な「柔道」というスポーツに変形させることであった。殺傷捕縛を目的としていた柔術は安全を担保して体育化した。武術の体育化において嘉納の柔道は抜きん出ている [寒川編 2017: 2-9]。

竹内の言うように、明治時代の旧制高校生のイメージは剛健で質実であった。これは明治20年（1887年）前後では、旧制高校にまだ士族の子弟が多かったことによるところが大きい。竹内の調べでは、明治20年に士族出身者は一高で60.0%、明治21年の五高で77.3%、三高でも明治20年で37.3%である。これが明治43年（1910年）になると、五高はまだ40.8%だが、ほかは25%台に下がっている。代わって職業的に増えてくるのは、会社員・銀行員、専門職など中産階級であり、裕福な家庭の子弟が占める [竹内 1999: 172-9]。ちょうどこの時期、明治30年代には文化主義的な教養主義が広がりを見せる。新渡戸稲造（1862-1933）が一高校長だったのは明治39年（1906年）から大正2年（1913年）である。和辻哲郎（1889-1960）が『古寺巡礼』を出してベストセラーとなったのは大正8年（1919年）。ちょうど嘉納から新渡戸への校長就任時期の違いと当てはまっている。

東大医学部出身者にスポーツに積極的な人物が観られることは興味深い。出町一郎によると、これは東京帝国大学医学部の外国人教師でドイツ人のエルヴィン・ベルツ（Erwin von Bälz, 1849-1913）の影響が大きいという。彼は明治9年（1876年）から27年間、東大医学部の教師を務め、明治35年（1902年）設立の日本医学会の名誉会長になっている。学生に対してスポーツを積極的に奨励し、勉学とスポーツとのバランスをとるよう求めた。病体ばかり学んでいても健康体を強壯できない。身体を強健にするための体育について医師は理解し、体育によって身体を鍛錬すべきだという [寒川編 2017: 78-9]。こういう理由から、東大医学部の学生たちは自らもスポーツに参加する人物が多かったと推測される。

また、東京大学の「運動会」の成り立ちの影響もある。澤井和彦の調べでは、東京帝国大学では明治19年（1886年）に「帝国大学運動会」が設立される。明治31年（1898年）に社団法人化し、大正20年（1920年）に文科系クラブも併せた「学友会」となるが、昭和9年（1934年）に分裂して「財団法人東京帝国大学運動会」となる。「運動会報」が現在に至るまで発行されているが、当初の誌面では「修練」や「心身の錬磨」「人格の陶冶」という修養主義的表現と、「国家的精神」「武士道の世界」「国家に対する有能の士」の育成の考え方と結びついた記述が多いという [寒川編 2017: 105-6]。

また中澤篤史によると財団法人となった昭和9年の「運動会」初代会長には東京帝大医学部長の林春雄（1874-1952）が就いている。彼は退官後には国立公衆衛生院の初代院長などを歴任している。理事では、医学部助教授の総務部長でラグビー蹴球部長の東龍太郎

(1893-1983)と、寄付行為の条文を作成した我妻栄(1897-1973)、法学部教授で民法などが専門の末弘巖太郎(1888-1951)が就いた。末弘は日本水泳連盟の会長、また大日本体育協会の専務理事も歴任した。東は、一高で漕艇部、東京帝大医学部でも漕艇部であった。東京帝大医学部教授となり、また同大学運動部総務部長となった。すでに述べたように東は、河合栄治郎が編集する『学生と生活』の中で「スポーツ」の項目を担当し、スポーツは「研学・思索の本流」に対する休養だと言うだけでなく、「スポーツの神髄は不断の修練にある」と述べて、オリンピックがすでに「競技成績万能主義」となっていると警鐘を鳴らしていた。

財団法人化以前にも医学部は工学部とともに、学部方針として学生に運動会への加入を義務づけていたという。学生の健康問題が現れる中で、大学は学生の健康な身体づくりを画策した〔寒川編 2017: 37-49〕。末弘はまた一高時代に漕艇部に属して、新渡戸稲造校長の運動部冷遇を批判したという。竹内によれば、一高では運動部系の蛮カラ学生と文化部系のハイカラ学生が対立していた。新渡戸の前の校長である狩野亨吉(1865-1942)が運動部に好意的だったのに対して、運動部学生は新渡戸を運動部に冷たい「ハイカラ紳士」とみなしていたという〔竹内 1999: 222-7〕。このような一高での学生たちの運動クラブに対する態度の違いがこのまま東京帝大にも持ち込まれたのかもしれない。

また大学は学生の左傾化にも苦慮した。東龍太郎は、運動会が学友会から独立した経緯は左翼系の学生団体が予算面で運動部に不当な弾圧をしたからだとして昭和9年の『帝国大学新聞』で書いている。同じ医学部教授で漕艇部部長の石原忍(1879-1963)は過激思想の団体に悩まされて、学生の精神鍛錬には運動競技が必要だと述べたという〔寒川編 2017: 54-6〕。この時期に東京帝大で文化系の学生団体を牛耳っていたのが新人会や社会科学研究会など左翼団体であるならば、理系エリートである医学部の教授や学生が、精神修養にとって文学や哲学などの読書よりも、スポーツを望ましいと考える傾向にあったとしても不思議ではない。ただ、1960年代末の東大闘争がやはり医学部から始まったのは興味深い。

ただし澤井によると、彼自身が東京大学の助手をしていた2000年当時でも全学生の9割が運動会に加入していたが、実際の運動部員は1割程度であり、運動部員以外の会員の会費が運動部につき込まれていると指摘している。独立会計である東京大学運動会では運動部員のフリーライディングがより明白となっている。しかも戦前の学生は公共奉仕の精神もあったが、現在ではフリーライドしているにも関わらず、ひたすらスポーツに打ち込むだけである。これは東京オリンピックでも各種競技団体から「アスリート・ファースト」の名で様々に設備的要望が出されていることと同じであり、公共奉仕やスポーツ資源の開発というよりも、たんに当事者のエゴなのではないか、という澤井の問題提起はどの大学でも聴く耳を傾けるに値するだろう〔寒川編 2017: 119-122〕。

このように戦前の東京帝国大学、とくに医学部出身者がスポーツ振興へ貢献していることは注目される。この傾向はさらに第二次世界大戦後においてジャーナリズムの世界で継続することになる。それは文学部などの「教養主義」的人格主義とは別のハイカルチャーと言えるだろう。ここでも、興行化されたスポーツではなく、あくまでアマチュア精神に

基づき学生の健康な身体づくりのためのスポーツを求める言説が繰り返される。

3-4 メディアに広がる進歩的知識人のスポーツ観

佐藤彰宣は戦後の『ベースボール・マガジン』を分析して、スポーツに対する言説の変遷をまとめていて興味深い。それによると同誌の執筆陣に学生の健康を求める医学部出身者が多いことが分かる。佐藤によるとスポーツが都市の大衆娯楽となっていく中で、戦前明治44年（1911年）に博文社から刊行された『野球界』では、大学野球の記事を中心に、時節柄、国防精神と関連させて「国民体位の向上」、日本精神の修養としてのスポーツの役割を強調していた。そのときの論客が、飛田穂洲（1886-1965）である。飛田は早稲田大学野球部の初代監督を務めたが、知識は学習から、人格はスポーツから形成されると唱えた。また嘉納治五郎らとともに大日本体育協会を創立した〔佐藤 2018：39-60〕。

昭和21年（1946年）には池田恒雄（1911-2002）によって『ベースボール・マガジン』が創刊される。池田は戦前に博文社に勤務していた。ここでも飛田は精神的鍛錬として武士の野球論を唱えたものの、他の記事は民主主義や科学というアメリカ的な価値観に基づく論考が掲載される。池田自身も野球はデモクラシーへの道に通じ、野球を通して人間性が鍛えられると考えた。また占領期のスポーツ政策としても「スポーツマンシップ」の精神でアメリカの民主主義を見いだそうとしたという〔佐藤 2018：75-87〕。

雑誌の執筆陣も、アメリカ帰りで日本のプロ野球振興に尽力した鈴木惣太郎（1890-1982）、東京大学でフランス文学を教える辰野隆（1888-1964）、東京大学で英文学を教えやがて評論家として活動する中野好夫（1903-1985）らとともに、東大教授で精神医学者の内村祐之（1897-1980）が主要な執筆者となる。佐藤はとくに内村を取り上げている。内村は一高・東大の野球部で投手であった。彼は近代的なアメリカ文化、理想的な社会としてのアメリカ像を野球に関連させて読者に教示した。内村はアメリカでは体育よりも徳育の手段としての野球であり、野球によってフェアプレイの精神と良き市民精神を国民に教えていると述べた〔佐藤 2018：88-97〕。この点で佐藤は、修養主義的価値観とアメリカニズムが接合しているとまとめているが、むしろ内村は100パーセント、アメリカ型のリベラル・エデュケーションの理想に即して野球を論じているように思う。大衆娯楽ではなく、健全な市民精神を養う社会教育としての野球観は新制大学の教育理念と同じである。

ただし、民主主義という道徳性としてのスポーツであるならば、「進歩的知識人」もスポーツを認めてよかったはずだ。しかしそうならなかったのは、正統派知識人は知性主義であり、身体形成よりも幅広い知識の獲得こそが市民形成の基礎だと考えていたからだと推測する。この点では内村自身も、スポーツはあくまで「余技」だと述べている。スポーツは市民精神を養う社会教育である。内村がプロ野球のコミッショナー職を打診されたとき、内村自身も本分を投げ打ってまで出来ないと述べた。スポーツ支持派の内村でもこのような考え方である。また東大総長だった南原繁（1889-1974）もそんな俗事に内村を引っ張り出しては困ると述べたそうだ〔佐藤 2018：99-103〕。すでに見たように東龍太郎も、スポーツは勉学のリフレッシュのためだという考え方であった。クラブ活動として課外で

するのは「社会教育」として望ましい。しかし正課としてのスポーツ課程はまさにプロ選手の養成を目的としており、そのような「興行」に関わる人材養成は大学の目的ではないという知識エリート主義的な考え方が根底にある。こんにちでも日本版 NCAA が頓挫しているのも大学生がクラブ活動で「お金儲け」することへの違和感だろう。

さて佐藤によると、その後もベースボール・マガジン社は昭和26年（1951年）に『陸上競技マガジン』を出して、『ベースボール・マガジン』と同様にアメリカを学ぶべき模範像とする傾向が続く。また1955年に『プロレス』と『ボディ・ビル』、翌年も『女性美』誌を出して、欧米人並みの肉体の追求、健康と美容の追求をおこなう。さらに1966年創刊の『サッカーマガジン』では、日本蹴球協会会長の野津謙（1899-1983）が、青少年の健全育成としてのサッカーを唱えた。彼もまた東京帝大医学部卒で、蹴球部であった。ハーバード大学に留学したという野津は、リベラル・エデュケーションの理念に影響されたのだろう。副会長の篠島秀雄（1910-75）も、社会連帯や国際感覚を養うためにサッカーがよいと述べている。そしてやはり東京大学出身の岡野俊一郎（1931-2017）が紙上にて知的スポーツとしてのサッカーのイメージを広めた〔佐藤 2018：156-213〕。

竹内洋がスポーツと教養を対立的に捉えているのに対して、佐藤は、大学こそが学問だけでなくスポーツができる場であったことを考えれば、学歴エリートがスポーツの担い手でもあったと述べている。重要な指摘だろう〔佐藤 2018：266〕。ただし、内村においてもスポーツは「余技」であったし、中野好夫でも「見るスポーツ」愛好家に過ぎない。岡野も解説者として有能であるが選手としてはどうか。多くの学歴エリートにとって医学や文学などが本流であり、スポーツを職業にするなどはやはり縁遠いと言えよう。

また、たしかに雑誌にはアメリカ志向の記事が満載するが、しかしながらここに見られるのは進歩的知識人のようなアマチュア精神ではなく、プロスポーツ志向、商業主義志向である。大衆化と同時に起こる興行化の進展の中で、やがて『ベースボール・マガジン』も1953年には写真を多用して視覚に訴え、内容的にも道徳性や公共性よりも選手の私生活の紹介などとなっていくという〔佐藤 2018：126-130, 136〕。そこから同社は、硬派のオピニオン雑誌も発行するものの、基本的には大衆文化に即した雑誌を数多く発行していく。マイカー時代の『最新自動車読本』、ミリタリーカルチャーでは『GUN マガジン』、レジャーブームには『ヨット&モーターボート』、『ボウリング』。昭和42年（1967年）に復刊した『ボディ・ビル』誌は三島由紀夫を誌面に登場させてその「知性と行動の一致」という態度を賞賛している。1965年の男性誌『FIVE6SEVEN』ではダンディなライフスタイルを読者に提示する〔佐藤 2018：222-237〕。教養と行動を併せ持ち、モダンな社会での生き方の手本を示した雑誌方針は、まさに今の学生たちに喜ばれそうである。スポーツ教育に固執するだけの教授とは大きな違いである。

リベラル・アーツの理念で学問的「教養」を教えて、市民社会のエリートを育成するとともに社会組織の中に大卒サラリーマンを送り込む段階までは、いくらかは戦後の大学教育は社会に関係していると信じることができた。役に立たない虚学であれ、階層差別化の知的戦略としてエリートや中堅労働者の養成を担う。しかしながら、さすがに勉学とは関

係のない課外活動でプロのスポーツ選手やプロの芸能人を排出することは許しがたいという気持ちが教職員の中にあるのだろう。ただし、教員たちの志向とは別に、現実には学校は職業としてのスポーツ選手の予備教育となる。「人格形成」とは遙か遠く、さらには「社会教育」としてでもなく、明らかに商業主義に直面している。学生スポーツの勝利至上主義は最近でもマスコミを賑わす。そこにはフェアプレイという品格がスポーツからなくなっている。選手ではなく、むしろ指導者・コーチ、そして役員の姿勢が問われている。

さて、この他で高度成長期に進歩的知識人や左翼政党はスポーツをどのように見たらうか。1964年の東京オリンピックに対する進歩派知識人の発言では、まず大江健三郎(1935-)は開会式について後述する三島由紀夫の文章と対照的である。ここでは東西ドイツの統一選手団ができたこと、しかし北朝鮮チームは参加していないことなど、政治情勢の話が続く。また聖火ランナーについても三島のようにランナーの聖なる性質を描くのではなく、そのランナーが原爆投下の日に広島で生まれた青年であることに言及し、悲惨を背景にしても健康に満ちあふれた青年がランナーであることを愉快だという。オリンピック旗を掲げた海上自衛隊員についても、「いつまでもおかざりの兵隊でいることができるように、平和を！」と結ぶ(『サンデー毎日』1964年10月25日)[石井 2014: 20-27]。

また閉会式についても大江は醒めており、「この2週間続いたオリンピック熱の執拗さ！」に驚く。彼の描写する閉会式は暗く陰鬱だ。オリンピックは無秩序なお祭りであり、現実生活では役に立たないその場限りのものである。それは「お金になる」ものとしてマスコミに煽られ、人々を「消費文明ロボット」にする。また愛国心も高揚し過ぎである。この時期にもフルシチョフの失脚、中国の核実験、日本の首相の引退声明と続く現実生活を観るべきだという(『サンデー毎日』1964年11月8日)[石井 2014: 156-164]。

「ベ平連」の中心人物である小田実(1932-2007)の短い文章には、左翼のスポーツ観が満載である。まずスポーツは金とヒマのある貴族階級や自由市民のするものだというよくある紋切り型で切り取っている。ただ、水泳や陸上はからだ1つのできるのでやや庶民的だと。結局のところ小田の主張は、スポーツは政治利用されるという話に帰着する。そもそもスポーツなどについて考えたこともない左翼のスポーツイメージはまさにこうしたものである(共同通信, 1964年10月24日)[石井 2014: 172-4]。別の文章でも小田は、よい商売、アマチュアリズムの欠如、関心が無いと非国民扱い、「滅私奉公」や「選民思想」というようなキーワードで分析する(共同通信, 1964年10月7日)[石井 2014: 55-7]。現在の自称進歩派学者のする「カルチュラル・スタディーズ」などがスポーツとナショナリズムを関係させる視点で分析するのも同様の発想がある。

同じく「ベ平連」に参加し、『ベースボール・マガジン』にも執筆していた中野好夫(1903-85)は、パラリンピックのほうを観戦して、これこそがアマチュアリズムの本来のスポーツの姿だと述べている。オリンピックのほうはすでに実質的に企業の中でプロ化している。金がかかるし国民的熱狂も呼び起こしてしまう。それよりも「明るく朗らかな運動会」のようなパラリンピックのほうが「人間が動いていた」との感想を述べている(『週刊朝日』1964年11月20日)[190-3]。中野はスポーツ好きだが、オリンピックに対し

ては、札束を敷き詰めた道路に対して、生活環境の酷さが改善されない点を批判している（『週刊朝日』1964年10月16日）〔石井 2014：108-110〕。

「ベ平連」呼びかけ人の開高健（1930-89）の文章に至っては、開会式を完全におちよくっている。「超世の慶事でござる」と言うわけだ。ここでもようは、国民的ばか騒ぎと莫大な金の支出を問題にし、他方で南ベトナムの貧しい生活と対比している（『週刊朝日』1964年10月23日）〔石井2014: 28-40〕。オリンピックに対する左右の「眼鏡」の違いは顕著である。左翼の論点は、1、金がかかる、2、庶民生活の貧困、3、国民的熱狂、4、アマチュア精神の欠如、5、政治利用、である。

次に70年前後の旧左翼の求めるスポーツ観はどうだろうか。昭和45年（1970年）9月刊行の民青同盟のパンフレットには活動方針として、同盟員は祖国と青年解放のために必要な大切な身体であることを自覚して、からだを鍛えて健康であるべきだと書かれている。スポーツ活動を通して集団性、規律性を養いながら、マルクス・レーニン主義の理論と、スポーツで鍛えた集団規律性を持つことが目標だという。さらには、クラブ活動の先頭に立って活動するとともに、「政治的なものの見方や考え方ができるような活動方法を取り入れていくことも必要です」とも述べている〔思想運動研究所編 1971：147-158〕。

また別の民青の文章（昭和44年11月の民青第11回全国大会）では、とくに「スポーツを支配する正しくない考え方の問題を積極的に提起」せよという。「正しくない考え方」とは、「スポーツを軍国主義復活の道具にするな」「自主的、民主的なスポーツ組織を発展させよう」とも述べてあるので、このことだと思われる。もしくは商業主義的な職業スポーツ、興行としてのスポーツ観のことも含むのかもしれない。それよりも、共産党系の新日本スポーツ連盟がおこなっている「スポーツ祭典」の標語のように、「だれでも、どこでも、いつでもできるスポーツ」活動が大事である。とりわけ登山、ハイキング、海水浴、スキーなどが例示されている〔思想運動研究所編 1971：203-209〕。反資本主義組織として、自然に親しむスポーツ、しかも小田実の文章にもあったように、金のかからない安上がりなスポーツがやはり奨励される。もっとも今やハイキングすら専門の高い道具を身につけた人たちが多い。アマチュアリズムの精神を受け継ぐ社会教育の一環としてのレクリエーションという概念はいまも生きているが、これも大衆の求めるストレス発散のためのレジャーとは乖離している。登山とハイキングに限定する勤労者や貧乏学生のための組織スポーツという発想はもはやアナクロにしか映らない。

ちなみに、ここに出ている「新日本スポーツ連盟」とは、そのホームページによると、市民スポーツの振興、スポーツを通して平和を守り育てることを目的として、反核平和マラソンなどを実施している。まさにオリンピックと同じ考え方である。またフェアプレイの精神を育て、スポーツ選手の人権確立、スポーツを通じた国際交流など、市民養成としてのスポーツを意識している。種目別には登山、卓球、スキー、テニスが多いのが特徴的であり、ほかに陸上、水泳、国民的スポーツである野球、サッカー、バレーボールとなっている。金のかからないスポーツ、プロスポーツとは関係のない競技が中心である。会長は日本共産党代議員の和食昭夫氏である〔新日本スポーツ連盟 HP〕。

ここで注目すべきは、組織政党である旧左翼において結局はスポーツサークルを通じて労働者や学生を組織化することが目的になる点である。プロスポーツのように一部の人間ではなく、大衆の組織化にプラスに作用する活動を求めるのは共産党として当然の理屈だろう。さきほどの昭和45年9月の民青パンフでは、「自発性」をうまく発揮し、キャンプなどのリーダーを必要とし、お互いに援助しあうべきであり、とくにサークルが複数集まればサークル協議会を作るべきだと教える。具体的には「スポーツ祭典実行委員会に積極的に参加」することだと書いてある。サークルを作るに当たっては、「サークルをつくる意義について意思統一する」「サークルの規約要綱の案をつくる」「サークル結成の呼びかけ(案)をつくる」「総会に提案する」「規約を決める」「活動方針、行事計画をつくる」など、まさに共産党組織と同様のルールを求めている[思想運動研究所編 1971:153-6]。どこぞの大学でも、やたらと規約ばかり作成しては喜んでいる御仁たちもいるが、これまた共産党流儀である。グループの中心にリーダーを入れるのは民青のいつものやり方だろう。高校生ばかりの会合において、一人だけ社会人が入って、「正しい考え方」について指導する。誰かがタバコを吸っていると、未成年喫煙に対して自発的に討論させていく。そして「同志愛」によって喫煙を止めさせるのである。

ちなみに人間形成に対して共産党は「党員のプロレタリア道徳」「共産党員として、恥じない品性」を求めている。読んでみると具体的には金銭、飲酒、異性関係のトラブルに巻き込まれないなど、一般的な内容に過ぎない。結局は社会主義国家建設の主体形成という理屈付けだけが違うようだ。むしろ中身よりも、それを自己点検、さらには相互批判せよという点に特徴がある。「相互批判、相互点検を活発にしてだらしのない者がいたら、気のついた者は、率直に、同志的にそれを批判し、けっしてなれあわないことです」(1964, 11, 28「第九回党大会に対する中央統制監査委員会の報告」)[日本共産党 1976:73-8]。自主性を求めつつ実際には相互監視によるチェックをする。カンボジアのポルポトも中国の文化大革命も同じ理屈だったことを連想してしまう。

逆に学ぶべき学問について宮本顕治(1908-2007)は1972年の文章で、哲学的世界観、経済学、日本の歴史など科学的社会主義の基礎法則を学ぶべしという。社会革命の実践のための理論武装としての現状認識や実践論である。ただし体育に関しては何も言及されていない。このような理論学習や運動実践の基盤として、大衆への奉仕、同志への配慮、連帯と相互支持などの「プロレタリアヒューマニズム」と、困難な中でも孤立を恐れず粘り強く勧誘する継続性、勇気、自己犠牲、献身という「プロレタリア英雄主義」で、人間性の豊かな発展を目指すのだという(宮本謙治「70年代に生きる共産主義者」『赤旗』1972年1月1日)[日本共産党 1976:101-114]。昔、ある民青の知人と話をしたときに、社会主義国は絶対に戦争しないから、朝鮮戦争は北朝鮮から攻めるはずはない、あれは韓国が先だ、という話を聞いたことがある。選別された偏った知識によって「一般教養」がつくられる。「科学的」というよりは政治信条で現実認識が規定されてしまうのだろう。

第4章 三島由紀夫と全共闘における「肉体」

4-1 三島由紀夫のヴァイタリズムと肉体賛美

本稿で問題としているのは自己形成のあり方の変遷である。さらにそこに「実学」と「美学」が関係してくる。左翼思想や右翼思想などは、この自己形成として当事者たちが吸収している限りで問題となるに過ぎない。教養主義でも、反知性主義やヴァイタリズムでも、新左翼の「総括」でも、それぞれに自己形成を目指す点は同じである。「理念」だ「現実」だ「幻想」だと当事者たちは真面目に語り、またそれを根拠に行動しているものの、それらもすべて自己形成の一部として理解できる。また、理論と実践と名付けられるもの、つまり思索と行為との関係性についても、自己形成において何を重視するかという考え方の違いに依拠している。知識によって自己形成すると考える者、行動で何かをすることで自己形成すると考える者。行動でも、職業行為なのか社会変革なのか。あるいは「精神」の形成なのか、「肉体」の形成なのか、「肉体」をどう捉えるのかという違いである。

本節ではまず三島由紀夫を中心に新右翼の自己形成を検討する。右翼の歴史についてはルポライターの安田浩一¹の書物が比較的偏りなく記述している。戦前に国体護持を支えにしてきた右翼は、敗戦と天皇の人間宣言とともにそれまで形成した自己の立場を失う。戦後においては一部に農本主義的な右翼もいたが、たいていは財界や自民党政権に従い、しかも親アメリカとなった。しかし新左翼の学生運動が登場した60年代末から、それに対抗するように新右翼の学生団体、いわゆる民族派学生運動が組織される。その主張は反マルタ・反ポツダム、つまり反ソ連・反アメリカであった。中心となったのは1960年結成の日本学生会議（JASCO）と、1966年に結成された早稲田学生連盟であり、後者の初代議長は鈴木邦男（1943-）である。しかし同年すぐに他大学学生も含めて日本学生同盟となると鈴木は脱会する。他にも生長の家を母体にして1969年結成された全国学生自治体連絡協議会があり、この委員長も鈴木邦男である。さらに鈴木は1972年に一水会を結成した。新右翼も新左翼と同じく、分派や除名などの連続であったという〔安田 2018：75-171〕。

三島由紀夫の盾の会と関係するのは、森田必勝（1945-70）が入っていた早稲田学生連盟である。また日本学生同盟の機関誌初代編集長だった持丸博（1943-2013）も早稲田大学であり、盾の会の学生長となる。機関誌『日本学生新聞』創刊号には三島由紀夫が激励文を寄稿している〔安田 2018：172-5, 183〕。

逆に新左翼の全共闘学生にとって新右翼は、体育会学生とともに大学当局や警察権力の実動部隊と映る。安田は長崎大学のかつての学生組織メンバーだった人物たちにインタビューしている。それによると昭和43年（1968年）12月の学生会館をめぐる闘争で学生会館を奪還しようとする左翼学生に対して、大学学生部職員、民青、新右翼学生、そして体育会の猛者たちがピケを張って阻止したと証言している〔安田 2018：184-8〕。いまや、かつて全共闘だった大学教授たちもまさに自分たちが「大学当局」となり、民青系の教員とも共同して左翼教員ポストの維持を図っていることは、まさに隔世の感がある。

こうした新右翼に理論的実践的に大きな影響を与えたのが三島由紀夫（1925-70）である。三島はオリンピックより前の昭和31年（1956年）頃、ボディ・ビルを始めている。その動機は本人の告白どおり、「肉体的劣等感」である。ボディ・ビルで強靱な肉体を得た三島は、「ボディ・ビル哲学」を披露する。曰く、知性にはそれとバランスをとるだけの量の肉体が必要だ。肉の力と形態を欠いたことが近代芸術の短所である。しかし完全に美しい芸術は精神の羞恥心によって肉を身にまとわせるのであり、羞恥心のない知性は醜い。ロダンの「考える人」も「肉体の力と、精神の謙抑が、見事に一致している」のである（『漫画読売』1956年9月20日）〔三島 2019：60-3〕。

他方で、スポーツによる肉体的健康は文学創作のために必要なものだとも書いている。体力に自信がついたから、知的な領域に没入できたという（『新体育』1956年10月）〔三島 2019：64-7〕。別の記事でも三島は、「いかに精神世界に生きていても、肉体は一種の物質である以上、そのサビをとらなければ、精神活動もサビつきがちになる」と言っており、心身の関連性は一般人が分かる程度の常識において関連づけられている（『体育の科学』1956年10月）〔三島 2019：68-9〕。この段階ではまだサラリーマンが休日にスポーツジムでリフレッシュするように一般常識的な三島の身体健康観である。しかし日付順に記事を読むとだんだんと肉体のダンディズムに陶醉していくのが分かる。そして昭和39年（1964年）の東京オリンピックに関するルポルタージュでそのロマン主義は最大に膨らむ。

三島は、ボディ・ビルに続いてボクシング、そして剣道も倣い始める。剣道は年老いてからでもなんとか続けられる運動だと思ったからだそうだ。戦争中は強制的に武道をやらされて「精神主義の総本山に他ならない」ので好きになれなかったが、いまの時代になると「お互い礼儀正しく対応したりするスポーツに、下手に外来のスポーツより、独特の面白みが感じられる」のだ（『東京新聞』1959年7月4日）〔三島 2019：88-91〕。それから4年間は剣道を続けて、「男のさわやかさを感じるのは剣道だけで、武士になったような男みょうりを味わうことができる」という（『週刊新潮』1963年3月18日）〔三島 2019：97-8〕。

「男らしさ」というキーワードは「私の中の”男らしさ”の告白」という記事へと続く。これは『婦人公論』という発表媒体を意識しているのだろうが、逆に挑発的である。つまりこれまで世間でいう「男らしさ」はいまや肉体的象徴としての意味しかもたず、もはや「男らしさ」の自律性と絶対性の夢は「古いロマンチズム」だという。そのように結論付けながらも三島はしかし、「筋肉と知性」は女が男にかなわないものだと強弁する。この2つを錬磨するために結局は「ただちにボディ・ビルをはじめ、片や、いよいよ思索と読書に耽った」と記している（『婦人公論』1963年4月）〔三島 2019：99-102〕。

いよいよオリンピックを迎えると三島は、体操選手団の練習を観て、体操は「美と力の接点であり、芸術とスポーツの接点」だという。「全身のどの隅々までも、バランスと秩序を与え」続けるのであり、「体操の美技を見ると、人間はたしかに昔、神だったのだらうという気がする」と記述している（『報知新聞』1964年9月14日）〔三島 2019：14-7〕。リポーターとしての誇張はあれども、かなりスポーツする肉体に陶醉している。

またオリンピック直前に「実感的スポーツ論」という長文記事も書いている。ここでもボディ・ビルの話から始まり、剣道の話へと至る。ただ、ここでは以前の1959年の文章と比べてかなりロマンティックに記述している。子供の頃にはきらいだった剣道のかけ声を心から好きになった。これは「自分の精神の奥底にある「日本」の叫びを、自らみとめ、自らゆるすようになったからだ」という。近代日本が押し隠してきた暗い記憶と結びついた「民族の深層意識の叫び」であり、「反時代性」を失わないようにと三島は唱えている。もっとも、実際のスポーツ政策としては、選手重視ではなくて、どんな初心者でもスポーツをする機会が与えられるのが望ましいという。そしてすべての人が運動のあとのシャワーの味でもって生きる喜びを知るべきだとも述べている（『読売新聞』1964年10月5-12日）[三島 2019：103-120]。この段階で、まさに三島の自己形成の拠点として、民族の古層あるいは伝統文化が唱えられている。

オリンピック後の「文武両道」という談話でも、やはり剣道が「何か祖先の記憶につながる」と述べる。そして自分とは正反対のものを取り入れてバランスをとることによって、「全人間的という姿」がなしうる。ところが三島は大正に入り昭和になると文武両道はだんだんと痩せ細ったという。大東亜戦争ころの人間像はバラバラであり、近代社会の毒を受けた人間が多かった。「理想的に美しい人間像というのは、あくまで精神に肉体のバランスのとれた、文武両道」なのだと、三島はかなり古典的で人文主義的な自己形成感を述べている（『朝雲』1970年10月）[三島 2019：121-125]。

ただし、近代的な思考だけでなく、同時に、肉体は民族の伝統文化とつながるという三島の考え方には右翼的発想があり、それはオリンピックの開催で最高潮に達する。オリンピックが開会すると三島は、小泉八雲が日本人を「東洋のギリシャ人」だと呼んだと言いながら、その感傷的な側面を強調する。開会式での聖火ランナーの肢体はまさに権力者の布袋腹や金権のはげ頭とは違い、瑞々しい若さの威厳があると評する。これこそが「青春」であり、つまりは瞬間だけの「無垢の勝利」であることをギリシャ人は知っていたという（『毎日新聞』1964年10月11日）[三島 2019：18-22]。ギリシャとのつながりと、民族共同体の強調は、ナチスの芸術政策全般に見られる傾向であった。お抱え映画監督のリーフェンシュタール（1902-2003）監督『民族の祭典』（1938年）でも表現されている。

観戦記でも三島は、競技に臨む選手の姿そのものを美的に表現する。「野獣の優雅」「人間という動物の神秘」「人間の精神が演じる無上の形」、人間を超えて真の誤りのない秩序を実現しようとする「完全性」。三島は選手の姿に国や民族の希望が見えるという[三島 2019：23-7, 38-41, 42-5]。閉会式についても、「多くの美しいパセティックな瞬間があった」。一瞬一瞬がスポーツの光栄の儚さ、青春の儚さというパセティックな瞬間なのである（『報知新聞』1964年10月25日）[三島 2019：49-52]。

ところで映画『東京オリンピック』（1965）を撮った市川崑監督（1915-2008）は、それから30年以上を経て沢木耕太郎（1947-）と対談している。映画は明らかにナチス・ドイツ時代のベルリンオリンピックを撮影したリーフェンシュタールの映画の影響があるように見受けられるが、やはり市川はリーフェンシュタールを意識したという。市川は『民族

の祭典』を観て、人間の肉体の美しさ、その肉体を通しての精神的な美しさに感動したという。「人間というのはこれほど崇高になれるのか」というのが第一印象だったらしい。市川も開会式に至るまでの過程に長い尺を充てているし、競技がスタートする前と後をしつかりと映像にしている。選手の顔のアップシーンが多く、その息づかいを捉えている〔市川 1956〕。対談の中で市川は、オリンピックというものは4年に一度の平和の夢であるという理解でまとめたという。そこから沢木も指摘するように、人と人の争いという競技そのものの記録映画よりも、祭りの全体的雰囲気を中心とした編集となっている。この点が本来は撮影するはずだった黒澤明（1910-98）との違いであり、市川映画の真骨頂である。もしもこの映画に別の題名を付けるならば何とすると尋ねられて市川は、『太陽』だと答えている。実際の映画でも朝日ならびに夕日の太陽のアップシーンが多いが、市川は「太陽はあまねく人間を照らしている生命の源、というところにテーマ」を置いたと述べている（『青春と読書』1998年6月）〔石井 2014：137-150〕。

さて、オリンピック後1965年に書いた「鉄と太陽」という長文で三島は、「私」というものについて論じている。「私」は言葉・精神だけではなく、肉体・行為によっても作られるという。一方で言葉の作用、他方で造形美と無言。それぞれ腐蝕されないように除去しつつ、「造形美に充ちた無言の肉体を、造形美を模した美しい言葉と対応させることによって、同一の観念の源から出た二つのものとして同列」に置くことで、言葉の呪術から身を解き放つことができる。まさに「文武両道」、文体と行動倫理との統一の企てである。肉体をもって言葉をなぞることで、「私の内部で両極性は均衡を保ち、直流電流は交流電流に席を譲るようになった」というのである。

さらに三島は、剣道がひとつの教養形成として、言語が呼び起こす諸特性に加えて、「果敢、冷静、剛毅」などの肉体的特性を付与すると述べる。拳の一閃や竹刀の一打の彼方に言語表現の対極にある実在を感じる。この場合に、太陽によって思考は、夜の奥から明るい皮膚に包まれた筋肉の隆起へと引きずり出される。「表面の思想を創造し管理するには、肉体的訓練が思考の訓練に先立たねばならぬ」のである。脳を知的に改造していく「教養」の過程は、筋肉と鉄との類似性を強めることにより肉体を古典的な理想形に仕上げることに似ている。しかも近代生活ではどちらもその非実用性は明らかであり、大多数の人にとって古典的教養が必要でないように、隆々たる筋肉も必要ではない。その死語となった筋肉を蘇らせるのが鉄による教養だという。ここには三島の反近代主義的傾向が見られる。現代文明で無用になっても、威信と美観のためには依然として筋肉的な装飾は必要だ。三島は、英雄主義あるいは強大なニヒリズムは、鍛えられた筋肉と関係があるという。逆にシニシズムは脆弱な筋肉か過剰な脂肪から出てくる。別な風にもいっている。「肉体的勇気とは、死を理解して味わおうとする嗜慾の源」である（「太陽と鉄」『批評』1965年11月-1968年6月）〔三島 2019：197-242〕。ここでの三島の発想はつまりこうだ。ニーチェ（1844-1900）の言うニヒリズムは「超人」として言葉のない無意味な空間を強く生きるためだが、それには言葉ではなく筋肉による教養形成が必要だというわけだ。

大宅壮一（1900-70）、司馬遼太郎（1923-96）との鼎談では、大宅のリードでオリンピッ

クでのナショナリズムの話になるのだが、三島はオリンピックによって「日の丸はよごれていてもなおきれいだ、というナショナリズムが出てきた」と述べている。またナショナリズムと平和とは二律背反ではなくオリンピックという具体的な場面でドラマチックに構成されたとも言う。さらに三島は「中共が京劇を禁止した」というこれから始まる文化大革命の恐ろしさを予想している。司馬遼太郎も、それはもうナショナリズムというよりナチズムに似てくると言うが、この司馬の指摘は少し違っている（『中央公論』1964年12月）[石井 2014：122-132]。それよりも三島は文化大革命が中国の伝統、民族の伝統文化を弾圧し、未来の共産主義国家像のみを理想とすることを危惧しているのである。「ナショナリズム」概念は三島の場合、ここでは民族の精神的・文化的な伝統として理解され、それを拠点とする人間形成のあり方がオリンピックに出ているというわけである。

石原慎太郎（1932-）の場合は閉会式に人間同志の共感の残響を感じ取る。オリンピックにより、文明の非人間的な便利さで忘れがちな「身心をかけて努め、闘うということの尊さ」を教えられたという（『日刊スポーツ』1964年10月25日）[石井 2014：154-5]。

ちなみに三島由紀夫が自らの原作をもとに監督・主演した映画『憂国』では、30分弱の白黒映像において、2.26事件を題材に、親友への友情、天皇への忠義、そして妻への愛、すべてを完結するために割腹自殺する主人公が描かれている。能の舞台のようなセットにおいて、吉田松陰座右の銘である「至誠」と書かれた掛け軸の前で、三島扮する主人公の臓物と血潮が短刀で切り裂かれた腹から溢れ出る。不協和音から長調へと解放されるワグナーの楽劇曲が全編に流れて、愛は死であるというメッセージの調べとともにギリシャ悲劇のような自死が美化される。ボディ・ビルで鍛えてきた三島の肉体の美しさ、夫婦の愛の形の美しさ、そして天皇と友とに捧げる死の美しさが表現されている [三島 1966]。

三島由紀夫の肉体美の賞賛は、日本の文化的伝統とつながる。また、反インテリ、反近代教養文化人的ではあり、それゆえに大学の青白い学者たちから嫌われる。しかし真実の法則、理にかなった動きの美しさ、そういう部分では、スポーツの肉体による「教養性」を述べているとも言える。ちなみに京都学派の中井正一（1900-52）も、スポーツ体験とは、意志の強化、技術美の体験、あるべき規則にはまったときの美を表現するものだと述べて、スポーツに「美的体験」を認識している [中井 1995：232-246]。

4-2 全共闘の行動主義と美学

時代に翻弄されながら生きる中国の京劇役者をテーマにした、陳凱歌（1952-）監督の『霸王別姫』（1993）という映画がある。主人公の二人は幼い頃から京劇団の師匠に弟子入りして、いまでは考えられないようなシゴキに耐えて、役者としての自己を形成していく。ところが激動の時代に人生は翻弄され、日中戦争のときも大変なのだが、さらには中国の文化大革命において、紅衛兵によって伝統的な京劇は破壊される。京劇の人気役者となった二人ではあるが、このとき彼らの弟子であった若者が紅衛兵とともに師匠の反革命的特質を問いただす。主人公は弟子に対して、何年も苦しい修行をしてこそ一人前になれると言い、古い「権威」の破壊を主張する弟子と対立する。しかし弟子は紅衛兵の暴力を

背景に威圧して自らが主役にとって代わり舞台に立つ。主人公は結局紅衛兵に捕らえられて、無理矢理に自己批判させられ、自己崩壊していくという物語である [陳 1993]。

この文化大革命の時代に日本や欧米で吹き荒れたのが全共闘の学生運動だった。日本の全共闘の学生たちが述べているのも、やはり同様に「権威」への批判である。彼らは三島由紀夫以上に既成秩序や権威に抵抗することで自己形成をした。それが資本主義と結びついているとか、国家官僚制の問題だとか、時代の流行言説に合わせて理屈を出すのが、根本的には大学教授という権威と権力に対する抵抗である。その権威を打破して、学生たちは自らの考える大学組織や社会体制を実現しようとするわけである。

大嶽秀夫は、欧米も併せた新左翼（ニューレフト）の特性をまとめている。何よりの特徴は近代合理主義への批判である。近代主義は具体的な形としてはケインズ型福祉国家と共産主義国家との両方の官僚的管理体制として現れる。既成左翼すら理論レベルのマルクス主義とは別に、実際は現実主義・保守主義となる中で、テクノクラート支配への抵抗として、それに代わる「人間性の回復」と広範囲な政治参加と自己管理を求めた。自発性の重視、直接行動という急進的な運動スタイルをとる。それゆえ、福祉国家に体制化した労働運動よりも、反差別の解放運動、マイノリティの運動、平和運動、反植民地運動などと結びついていく。思想的にも「プロレタリア革命」を脱皮し、「豊かな社会」が広がったことを前提として、そこで取り残された人々を問題にしていく。また国際的にも共産主義国家から脱して、ベトナム、そしてパレスチナへと移行した。その先駆けは60年安保時代の谷川雁（1923-1995、旧制五高から東京大学文学部）や森崎和江（1927-、谷川雁らと『サークル村』を創刊）である。

担い手層は労働者階級が中心ではなく、学生と知識人、上層中間階級の運動であったゆえに、大嶽はこの運動を「ミドルクラス・ラディカリズム」だと名付けている。「武井理論」のように、変革主体として学生層が想定された。何よりも「実存主義的心情」が中心であり、この運動は既存組織の規律への反発と同時に「不条理な暴力に立ち向かう勇気をエリート主義的、貴族主義的な矜持、誇り、高貴さ、品位、一言で言って「男の美学」によって与える」ものだったという。この表現は後にフェミニストから批判されるが、大嶽のいうように「アイデンティティ・ポリティックス」だった。そして1980年代から90年代にネオ・リベラリズムに主役を奪われた後、20世紀末から再び、「新しい『新しい社会運動』」として、反グローバリズムのスローガンとともに復活する [大嶽 2007：7-30]。

こうしたニューレフトによる行動は社会学においてフランスのアラン・トゥレーヌ (Alain Touraine, 1925-) が「新しい社会運動」と命名し、ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas, 1929-) やクラウス・オッフエ (Claus Offe, 1940-) も取り上げている。日本では梶田孝道 (1947-2006) の研究が有名である。私が学生のころ、社会科学研究会の学生が新左翼系の学生に「組織は大事だ」ということを強調しているのを聞いたことがある。たしかに現在の大学組織でも既成左翼を中心として、そこに新左翼がくっついている姿を観ると、組織の勝利と言えなくもない。しかし組織編成の問題というよりは、大学教授という安定した高給取りになって、「美学」を喪失したと言うべきか。

三島の行動主義が肉体への美学を持っていたのと同様に、全共闘の学生たちの行動主義、そしてその成れの果てである連合赤軍の活動にも「美学」があっただろう。絳秀実（1949-）によると、そもそも全共闘は「大学の自治」が教員の自治だけであったことから、東大医学部学生が「民主化」を求めた運動であった。安田講堂への機動隊突入を戦後進歩的知識人の一人である大内兵衛（1888-1980、東大経済学部教授、労農派、社会党左派）が感謝して「東大を滅ぼしてはならない」と述べたのも、「東大」とは教員のことだった。学生たちは教授たちの知識である教養主義への反感を持ち、東大全共闘は丸山眞男（1914-1996）の研究室を破壊する行為に至った〔絳 2006：32-3, 86〕。絳は竹内洋の言う教養主義からの切断は、マルクス主義知識人や日本浪漫派が繰り返し試みたが、すべて挫折したという。石原慎太郎が『亀裂』で大学教授の教養主義に嫌悪感を抱いていく主人公を描いている点を竹内は取り上げているが、しかし絳はその主人公が知的優位の象徴である学生服を愛用していたことから、石原でも挫折していると述べる〔絳 2006：32-4〕。

それでは新左翼にそれが達成できたかといえ、むしろ自らの知的優位性の強調は激しくなったと言えよう。絳も書いているように、1957年に太田龍（本名：栗原登、1930-2009）らとともにトロツキスト連盟を結成した黒田寛一（1927-2006）は、のちに革共同革マル派の最高指導者となるが、サルトルの実存主義の流行に呼応して人間の「主体性論」によるマルクス主義研究を続けた。知的優位性を持つエリートとして学生が大衆を啓蒙する主体であるという意識はまた、学生服姿のアジテータだった全学連初代委員長の武井照夫（1927-2010）にもあった。のちに「平学連」を構成する文化団体のひとつ、新日本文学会の代表でもあった武井の「層としての学生運動」論は、労働運動に対する学生運動の先進性を述べたものであるし、そこから「先駆性理論」も生まれてくる〔絳 2006：25, 29-32, 90〕。しかしすでに第1章で述べたように、それは知識全般に対する「反知性主義」ではなく、大学教授エリートの既存知識に対するアンチである。したがって、絳が学生服を着ていた石原を教養主義からの切断に失敗したというものの、しかし既存の大学知識人から断絶しているという点では、切断は成功したのかもしれない。

東大全共闘を主導した山本義隆（1941-）は黒田や武井よりやや若い世代である。彼が昭和43年（1968年）11月に書いた文書によると、東大闘争のきっかけとなった医学部で1968年1月に無期限ストに突入した理由は、卒業後の病院での研修をめぐる要望を大学に受け入れてもらえず、そこから「登録医制度」と「研修協約」を問題にしたのだという。研修医を低賃金で大学病院に縛り付けることへの反対である。学生・院生・研修医たちは、国家試験ボイコットや医局講座制解体など、現行制度を拒否する運動に入ったという（山本義隆「バリケード封鎖の思想」『情況』1968年11月）〔情況出版編集部編 1997：6-13〕。

また、東大で大学院生の共闘会議を組織した最首悟（1936-）は、やはり大学は政府と一体化しているという。自らを教授たちと区別して「プチブル」として認識し、あるいは「アマとプロとのあいだ」とも表現している。自分たちを文化エリートだと規定したくない気持ちがよく出ている。それまで学生は教員との知的共同体の中で教え養われてきた。しかし全共闘運動においては、大学自治の問題で政治的主体性を得ようとするとともに、

知的にも教員たちの知識から独立しようとした。しかし大衆を急進化させるため、自らには中間的な「プチブル」という役割を課す。また最首は、共産党は党組織を強固にしているのに対して、自分たちは組織の崩壊と結成のサイクルを繰り返しながら、吉本隆明に依拠して、前衛でなくても「中衛」でもよいし、もっと大衆団体に戻ってもよいという（最首悟「ノンセクト・ラジカル思想（談話）」『情況』1969年3月）[14-23]。もっとも新左翼各セクトはいっそう厳格な革命軍事組織となっていくのであり、官僚制組織の問題は民青だけの問題ではなかっただろう。

また、こうした医学生に対しては京劇の師匠ならずとも、立派な医者になるための修業期間として賃金に不満を持つとは何事かと叱りつけているだろう。自分たちが楽をして医者になりたいだけではないか、と。知的専門職も、芸人や職人と同様、基本的には徒弟修行であり、それが大学の講座制として残る。そのことを非民主的だという全共闘も、いやそれは民主的だという民青も、どちらも争点が違う。前半で述べたドイツの保守革命の思想家たちにもあったように、エスタブリッシュメントの知識文化そのものの拒否、それが「造反有理」だという考え方である。現在では教員から教えられる知識よりも、「学生同士で学び合う場」を各大学は教育ポリシーで強調している。しかし東大理三に合格するような学生ですら立派な医者になるためには徒弟修行が大事になる。普通の私学が学生の「自発性」に任せて、どのようになるというのだろうか。無理に教えてアカハラで訴えられるよりは、何もしない方がマシという判断かもしれない。

山本が後年に述べているところでは、東大医学部闘争はまさに「先進的部分」の闘争であり、それが大学全体へ広がったと自負している。学生たちの要求に大学側はまったく聞く耳を持たず、さらに強制的に排除したことからエスカレートしていく。やがて同年7月ごろには反戦・反安保やマイノリティとの連帯などの国政的メッセージまで追加されていく様子が、懐かしい「ゲバ字」のビラ資料とともにまとめられている。山本は丸山眞男の言動不一致を批判する。そして現実生きる大学教授たちの正義なき行動が書き連ねてある〔山本 2015：104-146〕。危機管理学部があっても危機管理できなかった最近の日大だけでなく、日本や世界の政治について語っていても足下の組織すらうまく対応できない東大教授陣が思い浮かぶ。

だが逆に言えば、全共闘世代においては知識人あるいは思想というものにまだ理想を求めていたに違いない。彼らよりさらに若い私のような1960年代生まれ世代では、大学教授などに正義も理想も感じないし、言葉など自己正当化の道具に過ぎないことは自明である。私がマジメな法学ではなくヤクザな社会学、とくに知識社会学に興味を持ったのもそこからである。いまや誰かが文章で「皆さんをリスペクトする」などと書いても、それを信じて民主的な組織運営がなされると考えて支持した者など誰もおらず、むしろその人物を先頭に据えれば自分たちのエゴが達成できると考えた上での権力集約行為に過ぎない。自分の言葉に不誠実な人物が、それを棚に上げて他人に真面目な顔で正義を要求するのは滑稽だが、現実の大学はその程度の欲望と権力の渦でしかないと理解している。これは一般企業も同じことだ。しかし当時の東京大学の若き学生たちは、言葉を言葉通りに受け取る真

面目な性格だったのだろう。

他方で中堅私学側の闘争である日大闘争では、大学ではブルジョアジーが支配を強化するための学問しかないと批判される。その対策として、日大全共闘のアピールでは、人間から分離された学問を再度編成しなおし、人間性を回復した学問をつくりあげるべきだと強調される。具体的にはどういう学問か分からないが、それは「教養」を身につけるための講座ではないという。また唯物弁証法から実践を抜き取っている「エセ社会主義者」の講義でもない。むしろ海外では「プロレタリアート意識を学生が構築し、革命情勢の発火点になろうとしている」というのだから、社会主義思想による現状認識や、理想社会へ向けての変革方法などということであろう（日本大学全学共闘会議「反大学アップール」『情況』1969年2月）[情況出版編集部 1997：91-94]。

日大闘争を指導した秋田明大（1947-）は対談で、日大闘争とは営利に走る大学の体制と、腐敗・不正・学生弾圧、そして講義の内容としても中堅技術者や中級労働者を大量に養成をする教育に対する抵抗だという。マルクス主義経済学の講義がない日大で、戦前に講座派として日大教授であった羽仁五郎（1901-1983、戦後は新左翼の理論家）などを講師に呼ぼうとして大学側に阻止されたのだという。「教養」のための学問ではなく、闘うための理論武装としての学問が必要であり、学問自身が戦闘的で実践的であるべきだと唱える。ここには反教養主義があるし、また機動隊など国家権力、大学当局・教授会、そして同調する右翼学生という権威を破壊したい感情がある。

戦後の大学でも、「教養」教育は、社会へ出て職業では役に立たないものの、ブルデュー的に言えば「知的資本」として、高卒から自分たち大卒を差異化する道具として作用した。とくに中堅私学では大衆化した学生が流入し、教養主義的な学問そのものの中身への批判が出てくるとともに、それが資本主義体制に中級労働者を組み込む作用をしているとの批判が出てくるのは当然だろう。実際に企業も、その最先端である東大の学生を、ペーパーテストによるその「教養」ゆえに採用している。「教養」知識は支配体制を維持するための知識であるならば、全共闘の学生たちがこれに抵抗したことも理解できる。

しかしながら、そのような左翼的知識による政治的理論武装こそ、社会に出てから役に立たない知識であり、本当に「大衆」である一般学生は求めてはいないものだ。またそのような革命思想などが一般学生の自己形成に貢献したとも考えられない。それよりも一般学生には、同じく「教養」のエリート文化に対する反発はあっても、求めている知識は逆に、もっと現実の職業に役立つ知識やスキルだったのではないか？

ここで対談者の劇作家、福田善之が秋田に問うているように、当初は学生の人権問題と学生からの提案を教育に取り込む民主主義のための闘争だったのに、社会全体の革命闘争へと変質していくことに問題はなかったのか。これに対して秋田は、そのような教育は資本主義の要請に答えているものであるし、人権や民主化の獲得も、大学を支援する国家権力と闘い、現代資本主義社会を抜本的に変えなければ達成できないと考えたからだという。その中でも、大学に対する当初の要求はそのまま継続しているし、それに社会変革が加わっても、学生大衆においては問題とならないと述べている（秋田明大・福田善之「学生叛乱

から総叛乱へ』『情況』1969年3月臨時）〔情況出版編集部 1997：48-59〕。

しかし、一般学生たちは最初の授業内容などの改革や学費値上げ反対までは共闘できたとしても革命の理論を学ぶというような講義案など求めてはいないだろう。大学内の問題から社会全体の革命闘争へと変質したことで、もはやキャンパス内ですのような行動ではなくなっていく。学生運動が学内問題だけに限定して行動していれば、いまごろ日大はじめ全国の大学は変わっていたかもしれない。しかしその範囲で留まることができなかったのが、この世代の自己形成のあり方だったのだろう。1970年代以降もしばらくは革命闘争が中心となったセクト活動がキャンパスでも残存していたが、やがて大学内で排除されていくことになる。大衆を先導しようという先駆主義はこうした一般大衆の欲望の取り違えによって没落していく。これは三島についても言える。彼も古代モデルの天皇を復活させたいというひとりのインテリである。すでに福祉国家の恩恵を受けている学生、労働者、サラリーマンたちが、どうしていまさら右であれ左であれ、革命など支援しなければならないのか。こんにちではこうした運動はあくまで少数の当事者だけの自己形成に過ぎない。

4-3 三島と全共闘、対決する自己形成

全共闘についてもっともよく理解していたのは三島由紀夫かもしれない。昭和44年（1969年）1月の安田講堂落城後、同年5月13日に東大教養学部教室で行われた三島と全共闘の討論会の冒頭、三島はモーリヤックの小説を例に挙げながら、亭主を毒殺しようとした女は、亭主を愛していなかったからそうしたのか、亭主を憎んでいたからなのか、いずれもはっきり言えないと語ったと述べる。むしろ「亭主の目の中に不安を見たかったからだ」と。三島はこれこそが東大全共闘にも当てはまり、日本の権力体制の目の中に不安を見たいに違いないという。そしてこれは自分自身もそうだと述べる。自民党と共産党が接点となるような既存体制、イデオロギーとは関係なく現状秩序維持を重視するいまの体制に対して、非合法で行動をおこす点では全共闘と自分自身は同じだと訴える。

討論会で三島は知識人が思想や知識の力で人間の上に君臨しているという形が嫌いだという。日本の知識人は安心した目があるが、それに対してこの中に不安を読み取ろうという気持ちを全共闘も持っていることに共感する、と。その象徴が東大であり、全学連が（三島は全共闘と言わずに全学連という）、「大正教養主義からきた知識人の自惚れというもの」の鼻を叩き割ったという功績は絶対に認めます」。このような行動を三島は「反知性主義」と名付けている。まさに第1章で取り上げた竹内洋の教養主義分析ではここから用語を取ったに違いない。知性のシンボルは大正教養主義であり、また現在では「丸山真男先生」である。「丸山先生はいつまでたっても知性主義の立場に立ってらっしゃるので、殴られちゃった」〔三島・東大全共闘 2000：9-16〕。つまり全共闘が反発する権威の中には日本の政治体制があるとともに、大正教養主義から丸山真男まで続く東大を中心とする「知性」、そしてその知性の力で人間の上に君臨していると考えた「知性主義」がある。

「知性」は確かに大正教養主義にしても丸山真男にしても「近代理性」に依拠したものである。ところがそれを批判する全共闘も、マルクスというやはり近代理性を対峙させて

いるし、マルクス主義は「プロレタリアート」を表向き担いだエリート文化である。また「知性主義」については、たしかに全共闘は行動主義ではあるが、知性に基づいた行動であり、また自らをプチブルと呼んで、革命を主導するという意識がある点では、旧来の左翼と変わりがない。吉本隆明や谷川雁などによって民衆の知識を求めようとしたとしても、たとえば文化人類学におけるレヴィ＝ストロースなどのように、「野生の思考」を評価するようになるのはまた次の段階である。よって全共闘では、「反知性主義」というよりも、むしろ「反エリート文化主義」と言える。マルクス主義思想を標榜しているうちは、やはり「エリート文化」の垂流には変わらない。この点は三島についても言える。彼の理論もまた時代のイデオログとして若者たちの行動に大きく作用した。

さて討論会ではここからフリーの討論となるが、エスタブリッシュメントに対して、「民衆」という言葉であれ、プロレタリアートという言葉であれ、体制を崩したいという思いは両者に見られる。三島はここに「天皇」という観念を加え、全共闘は社会主義体制という観念を加える。全共闘にしても同様の理想像があり、その観念の実現のために行動主義に走る。ただし全共闘の学生たちは天皇という形態がエスタブリッシュメントに属していると言い、逆に三島は「革命的なことができる天皇もあり得る」という。そこで学生たちは、三島のいう天皇は現実の支配体制なのか、それとも理想化された絶対的観念かと問いただす。三島は「統治的天皇」と「詩的、神話的天皇」とが、「一つの人間でダブルのイメージを持ち、二重構造を持って存在している」と述べて、両者は歩み寄らない。

絳は、この討論前に三島と村松剛（1929-94、東大文学部仏文学科卒、立教大・京産大・筑波大教授歴任）らとの座談会に言及する。そこで三島は、自分の考え方は全共闘と違わないが、実現性のない空疎な中で、「天皇陛下」というトランプで言うジョーカーをこちらは持っていると言ったという。彼にとって戦後社会はすべて「フィクション」であったが、その虚構を打破するのが「死」であった。また、盾の会で行動を共にしたうちの二人の加入する生長の家と同じく、「古事記」を中心とした天皇制の「正史」のなかにこそ三島の「現実」はあったということである〔絳 2006：119-121, 221-3〕。なんとも転倒した「リアリティ」ではある。

三島と全共闘学生たちとは既存の体制を打ち破りたいという点で同じだが、三島は過去から現在へといたる共同体を重視し、全共闘は未来へとつながる目的論的現在を重視する。右翼と左翼の基本的な違いであるが、そこから現体制批判という点は同じでも一致することはない。「天皇を天皇と諸君が一言言ってくれば、私は喜んで諸君と手をつなぐ」。これは「意地だ」というが、ここで三島のいう「意地」は、ようは左からの革命に対して右からの革命をするということである。どちらが成功するか分からない、しかし社会主義革命ではなく天皇を冠した右からの革命を考えるのは、論理を超えた意地しかないというわけだ〔三島・東大全共闘 2000：110-119〕。

討論の後、三島は討論で交わしたかった論点をまとめている。まず時間意識については、左右の思想的違いが明確である。三島が未来は存在せず、現在の一瞬が過去の最終的な成果であり、自己はその成就だと理解するのに対して、逆に三島によると、全共闘たちは過

去のすべてを否定し、記憶すら否定した。よって自己の現在を未来へとつなげるという思考にならざるを得ないという。ただし、現在における行動と思考を大切にする点では同じだと。つまり自己形成において、どちらも現在の行動を大切にすること、左翼においては未来の目的から現在の自己を意味付けるという思考になり、これに対して右翼のほうは、過去の成果として自己を理解することになる。

三島は、日本における革命の原理として「天皇」を考える。それは現存するとともにあるべき理想としての二重構造をもった「天皇」だという。その理想的な「天皇」によって、民族的な心性が論理的な政治体制を支える文化的天皇制が成り立つという。直接民主主義という観念的な政治形態に「天皇」の二文字を入れると日本の歴史と伝統に根ざし、日本人の深層意識に根ざした政治形態ができるという。これが戦闘を進めて行く原理となるいわばジョーカーである〔三島・東大全共闘 2000：123-143〕。どちらにせよ、「天皇」あるいは「共産主義国家」という理想社会に自らを結びつけて行動する、行動主義的な人格形成だと言えよう。

なお、理論と実践の関係についてかつてハーバーマスは、理論が実践主体の意識を方向付けるという伝統的役割を無くし、対象の技術的処理に志向するものとなってから、実践の領域に理性性を取り戻すことが課題となっていると述べていた。そこで、科学的知識を生活世界的経験のなかに位置づけ、また日常のコミュニケーション実践の中に理性的な目標設定を見いだすことが大事だと主張した〔Habermas u.a. 1969：160-4=1979：166-170〕。たしかに、ハーバーマスが問題としているように、専門科学的知識よりも社会的合意のほうが優先するという意味では実践優位かもしれない。しかし全共闘にせよ三島にせよ、彼らの現状認識や理想社会像が実践主体を方向付けている点では伝統的な理論と実践の関係そのままである。党派組織の対話の中でも合理的な目標設定が生まれたとは言えない。ハーバーマスは、科学技術的知識のイデオロギー性を強調するあまり、市民的实践での合意に理性性を見い出そうとしたが、左翼や新右翼の人間形成を見る限りは無理がある。

さて三島に対して全共闘側も討論後のコメントを書いている。「全共闘H」氏の文章では、三島の言う理想の歴史と伝統という文化概念からは、政治行動への意志など生まれないう。文化概念として絶対性を持つ「天皇」が現実政治としては天皇制国家と結びつき、権力構造を生むだけだ。そのような観念の世界よりも、「現実生きることに、それが肉体である」という。知識人は肉体を持たない言葉のさすらい人である。三島は肉体を持つとうとしたが、観念の解体の度合いが自分たちと違う。自分たち全共闘の学生は観念なき廃墟の中で、地位競争だけの近代市民社会の関係性へ反逆するのだという。

結局、全共闘の頭の中に実在するのは支配権力体制の関係性だけである。天皇を冠した共同体など実在しないし、その観念を絶対化して革命は起こらないというわけだ。戦後の大学教育で教えられてきた民主主義も「共同幻想」であり、実体のない概念、いまの言葉で言えば「シミュラクル Simulacre」（ボードリヤール Jean Baudrillard, 1929-2007）である。共同体の幻想が地上的権力として現れる構造を見ていないという批判である。

私が大学生のときは「ニューアカデミズム」ブームで、浅田彰（1957-）の『構造と力』

(1983年)が話題となった。現状への抵抗を試みたい若者にとっては、タイトルだけで魅力を感じた。同様に1968年の学生にとっては、吉本隆明(1924-2012)の『共同幻想論』(1968年)は自分たちの意を得たりだったのだろう。ただし学生たちが現代資本主義社会における「共同幻想」という使い方をしているにも関わらず、この書物は柳田国男『遠野物語』と『古事記』との分析を中心に、原初的な国家、とくに天皇制の本質を考察した書物である。全体的にフロイトの議論が下敷きにある。とりわけ大和朝廷の統一部族社会の「共同幻想」が強くなる段階で、ヤマトタケルは支配者の「父」に忌避される「子」として「倫理」発生の象徴となっている、などの分析は、現代の全共闘の若者たちが権威に抵抗する自分たちと重ねるに十分だったのではないだろうか[吉本 1968: 200-209]。

全共闘H氏は、共同幻想ではなく、現実の地上的権力に支配された共同体で、「己れの生が地上的共同体の関係性に呪縛された地点から普遍していく他にない」という。ただし、彼らの言う現状認識は、それ自体、ひとつの観念であることを全共闘は真面目すぎてわかっていない。また、天皇という観念でなくとも、共産主義国家の観念を目指して行動するのも同じことである。本当に観念がなくて行動主義であるならば、そもそも「天皇」も「共産主義」も持ち出さない。しかしこのような絶対的理念を持ち出して行動をおこなうところにこそ、左右の急進主義たるゆえんがある。

結局、全共闘の学生における政治主義的な人格形成のあり方は、社会や国家への独自の認識と、そこでの自己の「抑圧」や「呪縛」を前提に、それを取り払って、絶対化された理想社会に向けた変革運動をすることである。自己の内面の知識量増大とか、職業での技能向上などでの自己形成という考え方はない。権威や支配構造をめぐり闘う「肉体」を求める。全共闘Hの言うように、「肉体とは現実と直面した行為の持続である」。まずは支配の関係性に依拠し、既存の秩序志向しか持たなかった自己の経験からの断絶として自己否定をして、それから「到達すべき自己像」を設定する。「暴力によってしか自己が完結しない」のである。

全共闘C氏も同じく吉本に依拠しているだろう。「存在の恐怖に耐えられぬ者の幻想は国家を産み政治を産み、関係によって存在させて結末を向けよう」と述べる。さらに討論会で司会をしていた全共闘A氏は、三島が文学作品で共同幻想を述べたところで、自己の肉体に視線を転じると現実社会と関わらざるを得ないという。むしろ政治体制との関係で人間の日常的営為を明らかにすべきだと主張する。A氏の場合は吉本隆明だけでなく、マルクスの疎外論を援用する。「ここに人間主体は疎外され、自己は事物に転化してしまうのだ」。現実の社会秩序は人間から自由を奪うものであり、自己のものではないのであれば、そのような現実を行為によって超越していき、自己と事物の関係性を変革すること、これが新左翼の現状認識と理想像、そしてそれを媒介する主体の行為である。「人間が事物の絶対性を認識するのは、超越的志向による行動あってこそなのだ」という点では三島の文化的天皇制の設定と同じである。ただし、全共闘の場合は「未来志向」、三島の批判的言葉では「目的論」を前提としている[三島・東大全共闘 2000: 145-173]。

三名の全共闘メンバーの文章はいずれもアカデミズムのエリート文化の概念が満載であ

り、これ自体に非常にエリート主義を感じる。自分たちもよく理解できていないことを精一杯に虚勢を張り、理屈を述べている。近代理性の理屈を免れようと、エロスなどの用語を絡めているが、彼らが大きく依拠しているのはマルクスであり、さらには吉本隆明の「共同幻想」論である。この意味では、大正教養主義あるいは戦後の進歩派知識人の言説から距離をおこうとしているが、実際には新しい文化的流行語の使用である。

学生運動に批判的な吉田喜重（1933-）監督の映画『煉獄エロイカ』（1970年）では、登場人物たちは近代建築のコンクリートの迷路の中で押し潰されそうになっている。その無機質な空間でいまや科学エリートとなった主人公男性は学生時代に革命運動に参画していた。しかし同志からスパイの濡れ衣を着せられて絞首刑となる夢を見る。まさにこの世とあの世の境界で英雄気取りの若者たちは青春の空間をさまよう。やがて年老いた主人公は、夫婦愛のために残る人生を捧げたいと述べて終わる。これが彼らの成れの果てである〔吉田 1970〕。

若松浩二（1936-2012）監督が映画『11.25自決の日』（2012年）で描く三島と盾の会の若者たちは、決して英雄のように美化されず、悲劇の主人公でもなく、また道化師でもない。三島を慕う若者たちの無様で哀れな現実を描く。この映画の主人公はむしろ森田必勝である。森田が小さなモーターボートで北方領土に漕ぎ出そうとするシーンは、真面目であるだけに哀愁を誘う。立派な政治家になることを夢見て早稲田大学に入ったのに、結局は三島とともに自殺する。三島に道連れにされた世間知らずの若者だと感じさせられる。

いまや新右翼を引っ張る一水会の鈴木邦男は三島事件から随分と時間が経ってから自分史を書いている。たしかに鈴木は三島こそが民族派運動の教祖として死して蘇ったと神秘化している。しかし鈴木は自ら新右翼運動を続ける動機は、彼らとともに早稲田大学の学友である森田必勝が三島とともに自殺したことに「負い目」を感じるからだと述べている。またマスコミに取り上げられる新左翼へのコンプレックス、さらには逮捕されて拘置所で自殺する東アジア反日武装戦線の斉藤和や連合赤軍の森恒夫にショックを受けて、『腹腹時計と＜狼＞』（1975年）という本を上梓したという。同世代の新左翼活動家も学校では教師の話を素直に聞き入る真面目な性格であり、その革命家としてストイックな姿勢に鈴木は心を打たれたという〔鈴木 2015（＝1988）：11-57〕。

若松は、三島が自衛官にも彼のクーデター計画を現実的でないと言われ、また盾の会をともにつくってきた学生長の持丸博にも去られる、そうした三島の孤独を映し出す。結局は三島と、まだ学生の森田必勝という生真面目な二人だけで孤立していく。そして最後に三島は決死の演説をしても、市ヶ谷駐屯地の自衛官にすら野次られる現実をそのまま描く。哀れというほかない。ただし、若松は三島と若者たちの真剣さは茶化さずに、若者たちが何に人生をかけようとしたのか、しっかりと表現している。若者たちは真剣に革命のために生きる自己を形成しようとした。もちろんそれは実際にはあまりにも非現実的な夢想である。映画では東大での全共闘と三島の討論会も再現されている。当事者は真剣だが、しかしどこか非現実的な空間として現れる。小便をする場所が「解放区」となる話は冗談であるが、しかし実際はそのレベルだったのかもしれない。知識人を批判しながら自らもイ

デオログとなった三島と、そんな非現実的な三島に部分的には共鳴する全共闘の学生たち。映画では浅沼稻次郎（1898-1960）の刺殺から学生たちの街頭争乱まで実際の映像を使いながら、有象無象の時代の混乱のなかで自己形成しようとうごめく若者たちが描かれる〔若松 2012〕。

同じく若松が新左翼である連合赤軍の若者を描いた作品でも同様の視点がある。自己の成長がやがて社会革命の活動となり、無様で不細工で子供染みて、そして本人に取ってはとも真剣な活動家学生たちがそのままに描かれている〔若松 2008〕。どちらの映画でも若松は、これは時代劇ではなく現代の話なのだと私たちに伝える。エンディングに流れる曲は現代のフォークソングである。現代に生きる若者の自己形成の物語であり、しかも真面目に時代遅れの思想に翻弄される姿である。桜が散り、やがて紅葉が訪れる。若者たちのこういう儚い自己形成が現代にもあったのだということを感じさせる。

三島の映画において、最後のシーンに登場する三島の妻の言葉は痛烈であり、これが若松監督自身の主張だろう。妻は夫の死から5年経って富士山麓の演習場をさまよいながらこう言う。「あなたらしい幕引きだったわね。（でも）何も変わっていない」。そして生き残った盾の会の学生に尋ねる。「あなたが（防衛庁長官室から）出るとき、何を残したの？」と。その学生は震えながら手を開いてじっと見つめるばかりであった〔若松 2012〕。

20世紀の初頭から後半に至るまで、資本主義社会の現状や既成エリートの支配構造に反対して、大正教養主義から新右翼、新左翼へと至るまで、大学の知的エリートたる「先生」たちの思想に触れて、若者たちは自らの信じるかたちで自己形成をしてきた。ところがこれまで考察してきて言えることは、こうした行動はいずれもやはり「エリート」内部での自己形成の変容でしかなかったということである。しかも、知的エリート階層としての自負が強く残り、誰かへの「負い目」や汚れた外界への嫌悪と恐怖から、無垢で平和な理想郷を追い求めた。これは「政治主義的」になった教養主義はもちろんのこと、人格主義的教養主義にも見られる。ヘーゲル以来の理論と実践、思考と現実との関係性の問題が現代の若き知的エリートたちにも残る。ある種の理想主義やロマン主義の色彩を帯びて、自らの成長を「実学」あるいは「美学」でもって形成しようとする。それは、どこまでいっても教養階層の自己形成に過ぎない。

しかしここで除外されてきたもの、それは明治時代の修養主義から庶民階層にある職業労働における自己形成のあり方であろう。インテリ概念化した「生活者」ではなく、実際に大衆の中で見られる「実学」と「美学」。次なる課題はこれである。

おわりに 「実学」、そして「美学」の消滅と再生

ここまで見てきたような精神と肉体の統一，思考と行動の統一，そんな枠組みしか自己形成にはないのだろうか？　むしろ京劇の師匠の言うことを今一度，考え直すべきではないか。「知性主義」批判を行った全共闘も三島も，結局は思考の中で考えた空想社会を目指して社会変革実践による自己成長に囚われた。そこでの「肉体」も美化された肉体に過ぎない。こうした拘りは，最近でも身体化された言語スキルよりも，知識として精神化した国際理念を持った「主体」をつくろうとする傾向に現れている。いつまでこの枠組みでやっているのだろうか。

ドイツの社会学者H・シュルスキーは，現代において学校が果たすべき役割は，職業教育とともに「余暇教育」であるという。余暇を人間らしく満足させ，消費者的な娯楽や休養，寛いだ生活そのものを十分に営む能力，具体的には性教育，家事の技術，結婚生活，などの能力を身につけさせるべきだという [Schelsky 1965=1984: 33]。

シュルスキーによると，昔の上層階級の所有物である「教養」という高貴な精神的態度や生活態度は，マスコミ，娯楽施設などによって一般化し，いまや文化の伝達や精神的な人格陶冶の機会は義務ではなくなったという。むしろ休養や娯楽の意味での「教養」の利用が，個人的な威信や自尊心の欲求充足，人間に固有な最善の態度や心情の満足，あるいは余暇消費の節度や作法への導きとなるべきなのである [Schelsky 1965=1984: 42-3,72]。

かつて人文主義で言われた「全人 Ganzmensch」を得ようとする教育は，いまや職業労働と余暇とを統一する教育となる。人格陶冶とか，より高い精神的・人道的な人間形成を求める必要はない。調和的に完成された人格という人文主義の教育理想は，上流市民にのみ有効な，時代制約的な思想に過ぎない。いまや学校では，労働と余暇の構造から日常生活の意味，秩序，生きる喜びを獲得するため，職業労働のあり方とともに，自律的な余暇態度に向けて教育すべきである。消費者の選択や距離の能力，不精や遮断の能力，享楽の制限や集中能力の強化などは重要な教育となるだろう [Schelsky 1965=1984: 73-9]。

シュルスキーの意見で重要なのは，人間教育・人格教育から職業労働や余暇への態度を得ようすると失敗するという指摘である。むしろ逆であり，職業的・余暇的態度の確信は人間性陶冶の予備条件である。「人格陶冶や，より高い人間陶冶の前提として，職業教育，余暇教育，社会的教育がある」 [Schelsky 1965=1984: 80]。このようなシュルスキーの考え方は，まさに京劇の師匠のように，あるいは現代日本では稲盛和夫（1932-）のように，全人教育でなく，職業労働を通じた教育のあり方である。「精神」と「肉体」との統一という文武両道は，ここで「職業」と「余暇」という現実社会での人間形成として取って代わるのである。

さてここから我々が向かう場所は，文化エリートたちの人格形成から離れて，教養なき若者たちの人間形成のあり方だろう。「ワル」というキーワードを中心にしての考察が有効である。しかしこれについては，稿を改めて考察したい。

【後半の参考文献・引用文献】

- 三島由紀夫, 1966, 『憂国』東宝+日本 ATG
- 三島由紀夫, 2019, 『三島由紀夫スポーツ論集』岩波文庫
- 三島由紀夫・東大全共闘, 2000, 『美と共同体と東大闘争』角川文庫
- 石井正己編, 2014, 『1964年の東京オリンピック』, 河出書房新社
- 市川崑, 1965, 『東京オリンピック』東宝
- 情況出版編集部編, 1997, 『全共闘を読む』情況出版
- Riefenstahl, Leni, レニ・リーフェンシュタール, 1938, 『民族の祭典』IVC
- 日本共産党中央委員会, 1976, 『革命的気概と自覚的規律——共産党員の修養——』同中央委員会出版局
- 思想運動研究所編, 1971, 『戦場の民青』
- 「民青同盟の当面の要求」(1969年11月第11回大会), 203-209頁
- 「同盟はどのようにスポーツ活動をすすめるか」(「民青同盟とスポーツ」1970年), 147-158頁
- 新日本スポーツ連盟ホームページ <https://www.njsf.net/zenkoku/>
- 鈴木邦男, 2015, 『新右翼<最終章>』(新改訂増補版・=初版1988), 彩流社
- 山本義隆, 2015, 『私の1060年代』株式会社金曜日
- 吉本隆明, 1968, 『共同幻想論』河出書房新社
- Brunkhorst, Hauke, 1990, *Der Entzauberte Intellektuelle*, Junius Verlag, Hamburg.
- Hofmann, Annette R., Krüger, Michael Hrsg., 2013, *Olympia als Bildungsidee*, Springer VS.
- ・Grupe, Ommo, “Die Olympische Idee ist eine „Erziehungsidee“” S. 9-22
 - ・Hübner, Emanuel, “Gedanken über den Einfluss der Antike auf die Olympischen Spiele der Neuzeit” S. 37-59
- Habermas, Jürgen u. a., 1969, *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*, Luchterhand Verlag.=1979, 城塚登訳『社会科学の論理』河出書房新社
- Schelsky, Hermut, 1965, *Schule und Erziehung in der industriellen Gesellschaft*, Werkbund-Verlag=1984, 溝川良一訳『産業社会の学校と教育』有信堂高文社
- 大嶽秀夫, 2007, 『新左翼の遺産』東京大学出版会
- 中井正一, 1951「美学入門」=1995, 長田弘編『中井正一評論集』岩波文庫, 232-366頁
- 佐藤彰宣, 2018, 『スポーツ雑誌のメディア史』, 勉誠出版
- 寒川恒夫編, 2017, 『近代日本を創った身体』大修館書店
- 桂秀実, 2006, 『1968年』ちくま新書
- 竹内洋, 1999, 『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論社
- 安田浩一, 2018, 『「右翼」の戦後史』講談社現代新書
- 陳凱歌, 1993, 『霸王別姫』日本ヘルラド
- 若松孝二, 2012, 『11.25自決の日』アミューズソフト
- 若松孝二, 2008, 『実録・連合赤軍あさま山荘への道程』若松プロダクション・スコーレ
- 吉田喜重, 1970, 『煉獄エロイカ』松竹